

# 馬琴読本における予兆・卜占

黄 智 暉

## はじめに

文化年間における山東京伝と曲亭馬琴との読本執筆上の相互影響については、藤岡作太郎『近代小説史』<sup>①</sup>をはじめ、大高洋司「『優曇華物語』と『月氷奇縁』——江戸読本形成期における京伝、馬琴——」<sup>②</sup>、『山東京伝全集』<sup>③</sup>『馬琴中編読本集成』<sup>④</sup>の徳田武解題など、すでに指摘されて久しい。一方、同10（1813）年刊の『双蝶記』<sup>（そうてう き）</sup>を最後に京伝が読本の執筆を絶ったこともあって、後の文政・天保年間にわたって馬琴が読本作者としての本領を発揮して書き続けた長編史伝物における、往年の京伝作品の影響についてはあまり論じられていない。

本稿では、馬琴の中編読本『松染情史秋七草』<sup>（せうぜんじやう し あきのななくさ）</sup>（文化6（1809）年刊、以下『松染情史』）巻二・第三の烏と鷺の戦いに、京伝作『忠臣水滸伝』<sup>（ちゆうしんすい こでん）</sup>（寛政11（1799）年刊）巻三・第四回の黄蝶の戦いの影響が見られることを手掛かりに、後に『松染情史』の上記箇所が逆に『双蝶記』の趣向立てに示唆を与えていること、さらに馬琴の長編読本『開卷驚奇侠客伝』<sup>（かいくわんきやう きけうかくてん）</sup>（天保3（1832）年刊、以下『侠客伝』）の筋立てにまた『双蝶記』のそれが利用されていることを指摘する。その際、単に同時代の作者たちとの間の、度重なる趣向の受け渡しの一例として取り上げるのではなく、予兆・卜占の描写においてその影響関係が端的に見られることに注目し、歴史小説における戦乱の予兆としての怪異現象の意味合いについて考察する。また御伽草子『鴉鷺合戦物語』<sup>（あろ）</sup>や前期読本『莠句冊』など、馬琴と京伝が上記の各作品を執筆する時参考にしたと思われるものをも視野に入れ、複数の先行作との比較を通して馬琴の特徴を浮き彫りにする。

## 一、南北朝の対立の象徴として描かれる鳥と鷲との戦い

『松楽情史』は、南朝の遺臣である操丸こと久松と、秋野姫ことお染とが、長い流離の後出会って結ばれるという、貴種流離譚をテーマとしているが、その前置きとして、操丸の父親である楠正元を筆頭とする南朝の忠臣たちが足利氏と戦って討ち死にすることが描かれている。足利義満に降参した、父正儀の変節に憤りを覚えた正勝・正元兄弟は千剣破城に籠城するが、正元は城の前庭で鳥と鷲との戦いを目撃する。

からす さぎ あまたむれとび くひ ありさま さぎ みなみ とびきた  
鳥と鷲と、夥群飛で啄あふにぞありける。その形勢、鷲は南より翔来つ  
きた むか からす かけきた あひた、か や、ひさ  
て北に向ひ、鳥は北より翔来りて南に向ひ、相戦ふこと稍久し。(中略)  
いちわういちらい せんて ごて きつ はさ はわかく よつめぐろし ひちやう あらせ ごいし  
一往一來、先手後手。切つ夾みつ、綽る。綴五に飛鳥の争ひ、棋石  
なく こと かたみ いど あらせ さぎ つひ まけ ふんへ ち  
を投るに異ならず。迭に挑み争ふ程に。鷲は終にうち負て、紛々として地  
じやう おち し 上じやうに落、死するもの十二枚に暨べり。⑤ (巻二・第三「芒花に喚なす 敷  
なみぐさ  
浪草」)

とあるように、鷲の敗戦に終わり、うち十二羽死んだ。これについて正元はまず「白きは物の本源なるに、黒きに圧れて本を失ふ。これこの吉凶おそらくは、南朝衰廢の祥ならん」と言い、鷲の敗戦を南朝が衰亡する前兆とした上、夫鳥は、その色黒し。これを四方に配すれば、北朝に当れり。また鷲はその色白し。これを四方に配すれば、西なるべけれど。見よ、この鷲ことへく艸を銜たるに、死してなほこれを放さず。西に艸を冠すれば茜となる。茜は、一名染緋草、物を染て深紅なり。赤きは南方、これ南朝。乃至、南北両朝、多年のおん争ひ、その勝敗を示すに似たり。(中略)命を殞したる鷲の数をもち、未来を推量るときは、今より十二年ののち後、南朝終に絶給はん歟。(同所)

と言ひ、五行における方位と色の配当によって、黒い鳥と白い鷲をいったん北と西に割り当てるが、鷲が草を銜えたまま死んでいることから、「西」の字に草冠を付ければ「茜」、即ち赤・南になると説明し、この戦いが南北朝対立の

行く末を示していることを再確認する。さらに死んだ鷲の数から南朝が十二年後に滅亡することをも予言する。果たしてその予測通り、十二年後の明德三年、足利氏の主導によって南北両朝が合一し、三種の神器を手渡した南朝は実質的に滅亡することになる。つまり、五行の原理及び定数の概念によってこの怪異現象の、予兆としての機能が一層強化されたのである。

烏と鷲の戦いの設定は、御伽草子『鴉鷲合戦物語』（以下『鴉鷲物語』）の流れを汲んだものであるが、これに加えて徳田武氏は、京伝作『忠臣水滸伝』第四回の、塩冶家の危難を告げる黄蝶の戦いの場面からも示唆を受けていると指摘している<sup>⑥</sup>。この黄蝶の戦いに関しては、京伝が登場人物の大星由良之介の口を借りて、

嗚呼 怪哉 昔日宝治年間、相州鎌倉に黄蝶集り、府中に充満したる事あり。東鑑に云、承平には則常陸下野、天喜にも又陸奥出羽、四个国のあひだに此怪ありて将門貞任等鬪戦に及、是兵革の兆なりとしるせり。今已に此怪異を見ること、おそらくは是当家に鬪諍の起べき兆にてはあらず麼、可怪々々。<sup>⑦</sup>（巻三・第四回「塩冶竜馬三鞭千里寺岡神行一きやくひやくほ脚百歩」）

と言明しているように、『吾妻鏡』の記載に基づいたものであるが、『忠臣水滸伝』の場合と、黄蝶の怪異を戦乱の予兆とする『吾妻鏡』の記述との間にやや落差がある。由良之介がこの怪異を目の当たりにした直後、その子力弥が千里の馬に乗って塩冶家の危難を伝えに来る。つまり、黄蝶の怪異が目撃された時点で、塩冶判官の横死などの凶事（同第二回）がすでに発生しており、災いの予兆としてのその機能がいささか低減している。

それに比して『松染情史』の場合はより史書の書き方に即しているように思われる。特に五行における方位の配当という、易学的な解釈がなされている点においても、『鴉鷲物語』と共通点を有することに注目したい。縁談を断られた恨みから烏の真玄が軍を率いて鷲の正素を攻めることに端を發したという、幾分諧謔的性格を持つ『鴉鷲物語』であるが、術学的と思われるほど和漢の諸

典籍への援引がおびただしい。うち真玄と正素が決戦する直前の、真玄側の評定の議論においては陰陽道や五行生剋に関する知識が多く披瀝されている。九月六日を開戦日にするかどうかについて議論が交わされる中、

殿（真玄、筆者注。以下同）は三十一、木性のとり酉の御年なり。壬午は御ためには一生不用日也。しかも中鴨（正素の本拠地）戊亥にあたる。天一神の方なり。あまりに悪し、しばらく措きぬ。天一神の方に向かひて是非に弓を引かぬ事なり。山城守（正素）四十三とやらん申せば、土性酉、同じ性に参られ候の間、かれが為にも六日悪く候へ共、敵に懸けられては悪日かへりて利を得る物なり。<sup>⑧</sup>

（第六「住吉願書、後見烏悪日発向教訓、城用害之事」）

と後見の烏が言うように、真玄にとって六日自体は吉日でないのみならず、忌むべき天一神が敵の本拠地の方角にある日に出陣するのは避けるべきことである。さらに、

その上、六日より土用に入れば、土は王、木は囚にして、王、御身に当てばもつての外悪し。冬の節になりては、木は相、土は囚にし、相剋相生思ふやうなるべし。いかゞおぼしめす。土用のあきを御待候べし。（中略）明日の御合戦大に然べからず。（同所）

と後見の講釈が続き、土性の正素にあつては吉、木性の真玄にあつては凶という、土用の時期に出兵するのではなく、相生相剋の状況が有利に変わるまで待機すべきであるという。結局、真玄は日の吉凶にこだわるのをよしとせず、後見の忠告を無視して九月六日に出陣するが、ついに敗れてしまう。

「天一神」とはいわゆる十二神将の主将であり、その所在する方角に行動を起こすと厄難に遭うとされ、『靈籙内伝』という、安倍晴明の作と伝えられる陰陽道の典籍にその記載が見られ、<sup>⑨</sup>「土用」云々は陰陽五行説における時節の区分方法であり、中国渡来の『五行大義』などの易学書にその説明が載る。いづれも物語の記述にしてはいささか難解と思われるが、馬琴は『松染情史』を執筆するにあたって、異類合戦の設定を取り入れるだけでなく、易学的な記述

に関して、すでに述べたように、言葉のからくりによって烏と鷲をそれぞれ黒と赤に割り当てて南北対立の図式を作り上げており、五行の原理を導入できるよう、工夫していることがわかる。詳しくは後述するが、後の『侠客伝』においても予兆としての怪異現象が易学的に解釈されている。物語における予兆・ト占の機能を強化する重要なものとして、馬琴はこうした記述をテキストに組み込んでいるのである。

## 二、『双蝶記』における紅白の牡丹・青白の蝶の趣向

京伝最後の読本である『双蝶記』にも先述のような予兆・ト占の場面が見られる。本書は、南朝に与した相模（北条）時行が北朝側の月影ヶ谷判官照影に攻め滅ぼされたという、苦形城合戦後の南北両朝の確執を時代背景とする。討ち死にしたとされる、時行の遺臣大仏貞直と妻の更級が仲間を糾合して南朝の再興を図るが、苦形城の合戦時に生き別れ、今は月影ヶ谷家に仕えている、実子の動之介（元の名は蝶吉）と敵対することになる。最後に動之介の犠牲によって貞直と更級は前非を悔いて自害する。時代設定もさることながら、趣向立においても『松染情史』と共通点を有する。まず物語序盤の、塵兵衛と幣又が浜辺で将棋を戦わせる場面では、

これ塵兵衛、此通双方の碁子をつらねたるは、魚鱗、鶴翼、常蛇の形、  
是乃戦場に敵味方の対陣したるに異ならず。いやしき我等が口からま  
うすはかしけれど、今已に南朝北朝二裂にわかれておはしますは、此  
盤上に王の駒の二枚あるに同からずや（中略）角にひとしき名大將、足  
羽の深田に駒をおとし、飛車とはたらく楠どのも、湊川にむだ駒を打  
ちらし、（中略）南朝の王の駒は、吉野の奥盤上の片隅におはしまし、  
いつて一手か二手で搦にならふ、哀な事（中略）北朝方の足利家、今は盛んに  
ほこれども、此方の手にも駒がある。どこのいつくに名將が、かくれあ  
らんもはかられず、<sup>⑩</sup>

（『双蝶記』巻一・三「蛇くふと聞ばおそろし老女の懺悔」）

という会話がある。将棋の対局を戦場の対陣に喩えているのは、近松浄瑠璃『山崎与次兵衛 寿の門松』(享保三年初演) 中巻の将棋の場面を転化させたものである<sup>⑪</sup>とされているが、南北朝の対立に喩えている点も含めて、むしろ『松染情史』巻二・第三の烏と鷲との戦いの場面と共通点が多いように思われる。同所に「一往一來、先手後手。切つ夾みつ、綽る、綴五に飛鳥のあらそ争ひ、棋石を投るに異ならず」(前掲)とあり、烏と鷲との戦いを囲碁の対局に喩えている。

さらに本作の見せ場の一つである、山崎の油売り(実は北朝側の山咲余吾郎。更級一味に誑かされ、遊里に身を蕩かすことになる)が京五条坂の花魁吾妻(元の名は小蝶)と深い仲となる段においては、南朝側が敗退する前兆として以下の怪異現象が描かれる。

殊に奇きは一つの朶に二輪の花並咲て、一輪は赤く一輪は白し、これはゆる双頭の牡丹なり。時に二の残蝶花香をしたひ、翩々としてたはふれぬ。此二つの蝶一つは白一つは薄縹の色なり。是もまた奇なりといふべし。しかるに吾妻が手飼の猫花の下に睡居たるが、忽睡を醒して二つの蝶を目がけ、縵玉につけた鈴をからへと鳴しつゝ、飛びあがり駆けぐりて、余念もなげに狂ひけり。(中略)猫はますへ蝶に狂ひ、つひに薄縹の蝶をとりて喰殺しぬ。時に北風はげしく吹て牡丹を揺動しけるが、忽赤き方の花はらへと散て白き方は恙なし。

(『双蝶記』巻三・六「陽炎としきりに狂ふ牡丹の睡猫」)

とあるように、赤・白二輪の牡丹が北風に吹かれて赤のほう散ってしまい、青・白二匹の蝶が猫に襲われて青のほう食殺される。

この光景を目の当たりにした余吾郎は、

一枝に両花の王有事、今すでに南朝北朝とわかれ給ひ、一天下に二人の王のおはしますに異ならず。然に南方の火に属す紅牡丹、水に属す北風のために散失しは、北朝の聖運強くましへ、足利殿の徳風草木をなびかして、南朝味方のともがらの衰花を散し給ふ前表ならん。前の年信州

とまかた しろ ほろ さがみ じらうときゆき ならび そのみぎりうちじに だいぶつ くらう  
 苦形の城にて亡びたる、相模次郎時行、并に其 砌 打死したる、大仏九郎  
 さだなほら ざんとう よるい なんちやう てんい かり あしかこの ほろぼさ  
 貞直等が残党余類、南朝の天威を仮て、足利殿を 亡 んとはかるよし、  
 (中略) いまみ かうぼたん ちり へいけ ぞく とときき ざんとうめつぼう  
 今見しごとく紅牡丹の散たるは平家に属し、時行が残党滅亡  
 うたがひ うたがひ あしかがた よきさが  
 に 疑 なし。とまれかくまれ足利方にとりては吉祥なり、 (同所)

と言い、一つの枝に赤・白二輪の花が咲いているという、双頭の牡丹は南北朝  
 分立の情勢の象徴であり、特に赤い牡丹が北風に吹き散らされるのは、赤が  
 南・火に属し、北に当たる水に剋される、という五行の配当によれば、南朝が  
 ついに北朝に敗れることを示していると述べる。

また蝶が猫に食い殺されることの意味に関しては、後に山咲家の老臣南方十  
 字兵衛が余吾郎をかばって自害した時、

いまはた さきほど ふじや には こてふ ふしやう うたうら  
 今果思ひあはすれば、前程富士屋の庭の胡蝶のありさま不祥なり。歌占  
 うた  
 の歌に  
 きた き みなみ あを ひがししろにし やま  
 北は黄に南は青く 東白西くれなゐにそめいろの山  
 といひて なんぼう あを こ、 かんがふ あさぎいろ てふねこ  
 といひて南方は青きにかたどる。此をもつて 考れば、薄黄色の蝶猫にか  
 このなんぼうじふじびやう あ ひめい し ぜんひやう  
 まれたるは、此南方十字兵衛が非命に死すべき前表にてありしものを、  
 たふゆ てふ ほんりよ つたな ところ  
 唯冬の蝶のめづらしとのみ思ひしは凡慮の拙き所なり。

(『双蝶記』巻三・七「木枯の果はありけり記念の竹刀」)

と余吾郎が悟ったように、須弥山の南の空が青いという、謡曲「歌占」(元雅  
 作)の歌によれば、青い蝶の死は名字に「南」の字がある十字兵衛の死を予告  
 するものであった。

以上のように、将棋の対局や牡丹と蝶の怪異など、『双蝶記』における予  
 兆・卜占の趣向が『忠臣水滸伝』に比して格段に多く、そのほとんどが南北朝  
 の対立に関するものであり、しかも怪異現象の意味を解き明かすにあたって五  
 行の原理が援用されているところに、改めて『松染情史』の示唆が認められ、  
 馬琴に対する京伝の対抗意識も見て取れよう。なお、双頭の牡丹の怪異を南北  
 朝の対立に結び付けるという発想に関して徳田武氏は、都賀庭鐘『莠句冊』巻  
 四・七「大高何某義を励し影の石に賊を射る話」の、

時に南朝の元中元年より、六十九年正月二十九日、日輪東に登りて二形  
並べり。暫時にして一形は漸々に消失て一輪となる。(中略) 凡日月の徳  
は古今一ツなり。只其時の地気のそばへによりて望を異にす。彼海辺はさ  
もあらばあれ。我此山中に是を見る時は、帝土の興廢にかゝるべきか。日  
輪一ツにして円きを徳とし、願ふ所あり。今両の日の並び出るや、其一は  
映じて傍たるなり。傍たるもの遂に消じて一に歸したるは、是新都衰へ  
て旧都さかへんか。皇運の歎ずべき所なり。<sup>12)</sup>

という箇所に基づいたものとし、「『莠句冊』の日輪を牡丹に替えれば、双方は  
まったく同一の意味と同一の趣向を備えた場面になるのであるから」という<sup>13)</sup>

太陽がいったん二つに分かれ、やがて一つ消えて元に戻るという、『莠句冊』  
同話の描写と同じように、『双蝶記』では一つの枝に牡丹が二輪生えるが、風  
で一輪散ってしまうことになっており、さらに南朝の衰亡の前兆として描かれ  
ているのも原話の設定と一致する。確かに共通点は多いが、前述のとおり五行  
の原理を導入している点においてはむしろ『松染情史』との関連が認められ、  
前述の将棋の場面と同じく、浄瑠璃や前期読本などの原話との間に馬琴が介在  
していることに注目すべきであろう。特に『松染情史』に正勝・正元兄弟が父  
正儀の変節に憤りを覚えるとあるのは、『莠句冊』同話の、

南朝柱石の臣たる楠正勝、合体の時、父正儀に別立し、弟正元は京に入り  
仇刺んとして遂に忠死す。其後は十津川に入て已に四十余年。此時に及て  
老を極むといへども、余烈を失はず。帝居に参向して衆と共に興復を計る。

という記述に示唆を受けたものとも思われ、予兆の場面も含めて同話との関わり  
は『双蝶記』以上に深いようである。こうした、一対一ではない影響関係が、  
京伝と馬琴、及び両者が共に参照した先行作品との間に存在しているが、その  
影響をいかに自作に反映しているかについては、両者に明白な相違が見られる。

『莠句冊』に示される南朝正朔の史観に共感を覚えたのか、馬琴は『松染情  
史』において南朝の遺臣である操丸の活躍を描くが、南北朝合一による南朝の  
衰亡という歴史的事実の前兆として、烏と鷲との戦いという怪異現象を設定す



る。その際、五行の原理を援用し、南朝の敗退という、不本意な結果の必然性を述べる。最後に、やがて失敗する運命にある、吉野における南帝高福院の決起について言及したところで物語の幕を閉じている（巻五・第十「瞿麦にいふなつかし草」）<sup>14</sup>）ところに、馬琴の南朝びいきの姿勢が端的に表れている。

それに対して、『双蝶記』において京伝は南朝に味方した北条氏一味を、南北朝合一後の秩序を乱す者として描いているが、同書巻三・六の、「大仏九郎貞直等が残党余類、南朝の天威を仮て、足利殿を亡んとはかるよし、（中略）今見しごとく紅牡丹の散たるは平家に属し、時行が残党滅亡に疑なし」（前掲）という箇所を見ればわかるように、大仏貞直らは南朝側に属すると同時に、平家の残党ともされている。足利氏が源氏であることを踏まえてのことと思われるが、本作における南北朝対立の構図が早くも崩れかかっているのである。これに関しては夙に藤岡作太郎氏の指摘にあるように、北条氏が南朝に味方するのは「南朝の恥」であると馬琴が考えたのか、自作の『朝夷巡島記』（文化12〈1815〉年刊）において北条氏を罵倒することによって、『双蝶記』における南北朝対立の設定が大義名分に合わないことを間接的に批判している<sup>14</sup>。後の『侠客伝』においても、大覚寺統と持明院統との両統迭立を提案し、南北朝対立の遠因を作った北条貞時（時行の祖父）のことを非難している（第二十二回）。また『双蝶記』の終盤では、一子動之介の犠牲によって、打倒北朝のためだけに生き延びてきたはずの貞直と更級が、急に今までの行動を「悪」と認めて自害する、という終わり方も幾分唐突な感がある。そのため、南北朝の対立という全編の主筋を貫く力が弱く、南北両朝のいずれを正統とするのかは判然としない、という指摘もある<sup>15</sup>。当初南北朝対立の象徴として描かれているはずの牡丹の怪異も、いつしか本来の機能を失い、単に貞直一味の破滅を予告するだけのものとなってしまう。

『双蝶記』の執筆の際、京伝は『莠句冊』と『松染情史』の両方を参考にしたとすれば、先行作に明示される南朝正朔の史観に気付かずにいたはずはない。それを自作に用いないばかりか、いったん提示した南北朝対立の図式を最後まで

で維持しなかったのは、彼の意匠が政治論以外のところにあることを意味するであろう。怪異の場面に限って見れば、庭鐘の日輪の話を書き換えるに際して馬琴の用いる五行説を導入し、源氏（足利）と平氏（北条）を代表する色がそれぞれ白と赤であることを踏まえ、さらに歌占のことも加えており、趣向立てに工夫を凝らしていることがわかる。また物語の展開はいつのまにか南北朝の対立という基本構図から離れ、生育の恩と養育の情との板ばさみに立たされる動之助の苦境（生みの親である貞直は育ての親である塵兵衛を殺した張本人）の打開に収束していくのも、演劇の趣向を多用する京伝読本の特徴として読むことができる。特に演劇めいていることは「おかめ八目」（文化10〈1813〉年成）という、馬琴による『双蝶記』の評において、再三に取り上げて批判されており、ここに読本の創作意識における二人の根本的な相違が表れている。

### 三、『開巻驚奇侠客伝』における予兆とト占

以上のように馬琴は『双蝶記』に対して批判的であったが、にもかかわらずそれより十数年後の天保初年に執筆が始まった、長編史伝物『侠客伝』の筋立てには『双蝶記』のそれが少なからず利用されていることに気付く。本作も南北朝の対立を背景としているが、初集には諸国を行脚して再起の機を伺う新田貞方とその侍従畑時種が、北朝に従った千葉介兼胤の設けた罠にはまって捕らえられる、という話がある。貞方主従は兼胤の手先である妙算尼の庵の前で、赤い鶏が黒い鶏と戦って負ける、という闘鶏の光景を目にする。五行の配当において赤と黒がそれぞれ南と北に属するように、『松染情史』に引き続き、本作も五行の原理で南北朝の対立を解釈していることについては以前に述べたが<sup>⑬</sup>、ここではその前後の記述や設定が『双蝶記』との類似点が複数見られることに注目したい。

まず、闘鶏を見て警戒している貞方主従に言い聞かせるように、妙算は、  
わがかひどり たいかひ あか すなはちなんほうざんじん くろ すなはちほくほうすいとく すで じうん  
 俺わが参鶏かひどりの闘戦たいかひに、赤あかきは則すなはち南方なんほう残墟ざんじん、黒くろきは則すなはち北方ほくほう水徳すいとく、既すでに時運じうんを  
 得えたりといふとも、後ご日にちの勝せう負がは料はかりがたかり<sup>⑭</sup>。

(第五回「木主に謁して南将旧縁を感ず 便宜を演て老尼村酒を薦む」)

と解き明かしているが、これは『双蝶記』巻一・三の将棋の場面の、幣又が塵兵衛に話した以下の言葉を想起させる。「北<sup>ほくちやうがた</sup>朝<sup>あしかた</sup>方の足利家、今<sup>いま</sup>は盛<sup>さか</sup>んにほこれども、此<sup>こち</sup>方<sup>て</sup>の手にも駒<sup>こま</sup>がある。どこのいづくに名<sup>めいしやう</sup>将<sup>やう</sup>が、かくれあらんもはかられず」(前掲)と対局に負けそうになった幣又は言う。いずれも南朝が北朝に制されたという現状を述べると共に、南朝側が再起する可能性を示している。幣又の場合は大仏九郎貞直の決起を仄めかしているが、貞方主従を捕らえようとたくらんでいる妙算は、あくまでも南朝に都合のよい解釈をして彼らをなだめているに過ぎない。

その後、貞方主従を庵に泊ませ、毒酒を飲ませるという計画を遂行するために、妙算は貞方を油断させるべく、仮に彼の運命を占って「大吉」を出す、その際、「喜神」をめぐる術学的な講釈を延々と展開させている<sup>⑬</sup>。さらに新田義貞をはじめとする南朝の忠臣たちの位牌を庵の仏間に設置し、あたかも自分が南朝の者であるかのように見せかけるが、これは『双蝶記』巻六・十五の、養父洪右衛門(元の名は塵兵衛)の仇を追って蛭牙山にやって来た動之介が、山奥の草屋に泊まって主の老女(実は貞直の妻更級)に素性を探られる箇所を意識していると思われる。『侠客伝』では、

仏間で時を移せしは、拵<sup>こしらへ</sup>置れし義貞以下の、位牌をよくも見せん為也。那<sup>かれら</sup>們は果して位牌を見て、目を照<sup>め</sup>しつ、愀然<sup>あは</sup>たり。(中略)「予の計議は今この時ぞ」、と思ひにければ正しげに、俺身<sup>わがみ</sup>の素性<sup>すじやう</sup>を説示<sup>ときしめ</sup>し、新田<sup>に</sup>に旧縁<sup>つた</sup>あるよしと、殿<sup>との</sup>(千葉介兼胤、筆者注)の隠謀<sup>いんぼうしかへ</sup>恣々<sup>まこと</sup>と、誠<sup>まこと</sup>しやかに聳<sup>さか</sup>き告<sup>つげ</sup>て、

(第六回「福草村に三凶奇功を奏す 薬酒を醸して郡領来歴を詳にす」)

とあるように、妙算は偽物の位牌を貞方主従に見せ、自分は新田氏と旧縁があると欺く。『双蝶記』で動之介は老女の娘篝火に好意を抱き、婿入りを申し出るが、老女はそれを承知して互いに婿引き出物と結納とを交換する。その際、今世<sup>いまよ</sup>にはびこる足利<sup>あしかた</sup>の家<sup>いへ</sup>の紋<sup>もん</sup>、二引<sup>ふたつびりやう</sup>両<sup>りやう</sup>にたとへたる此<sup>この</sup>釜<sup>かま</sup>の蓋<sup>ふた</sup>は、四海<sup>しかい</sup>に

おほふ引出物なりと謎をかけしは、足利方のまはし者ならんと思ふゆゑに、  
我も足利方に所縁の者なりと思はすべく思ひて与へたるに、彼又中黒の紋  
にたとへたる鍋蓋を、結採なりと謎かけしは、我を南朝の味方と察し、  
おのれも南朝に心をよする者なりと思はせて、我に心をゆるさせ、我  
素性を探ん為の計略ならん。

（『双蝶記』巻六・十五「宿かして名をなのらする化石の鍋蓋」）

と後に老女が娘に告げるように、動之介を北朝の回し者にとらんだ老女は、わざと足利氏の家紋のような図柄が付いている釜の蓋を婿引き出物に差し出すのに対して、心なしか動之介は新田氏の家紋に近い図形をしている鍋の蓋を結納として渡す。その後、手下の者の報告によって動之介を敵と確信した老女はこれを討とうとするが、同情の念を起こした篝火はいち早く彼を逃がしてしまう。

南北朝の対立における登場人物の立場が逆になっているが、宿の主（更級・妙算）が自らの素性（貞直の妻・兼胤の手先）を隠して旅の者（動之介・貞方主従）に危害を加えるという点においては『双蝶記』と『侠客伝』は一致する。そもそもこの段に限って言えば、『双蝶記』は『醒世恒言』巻二十一「張淑児巧智脱場生」を翻案した『棧道物語』（雲府観天作、寛政10（1798）年刊）に基づいている<sup>19</sup>と指摘されており、『侠客伝』も『醒世恒言』同話を粉本としている<sup>20</sup>。『双蝶記』は原話の骨格を大分保っているのに対して、『侠客伝』では旅の者が止宿先で危機に陥るとい主筋を利用するのみであるが、南北朝の対立を人物関係の設定に導入する点において両者はほぼ同様な手法を取っているところに、改めて『双蝶記』への馬琴の視線を感じる。

また妙算が庵の仏間に新田義貞の位牌を置いているという設定は、『双蝶記』巻六・十六の、修行者に身をやつして大仏貞直を探索する山咲余吾郎が、兎角村に住む鶺鴒の閑作（実は貞直）の家に泊まり、

修行者は笈をかたよせ、魂棚に向ひ居て、先すゑおきたる位牌を見るに、  
延文四年三月十五日打死、大仏九郎貞直霊、とするしたり。

（『双蝶記』巻六・十六「おもしろうて頓てかなしき鶺鴒の腹切」）

と貞直の位牌を目にする箇所にもヒントを得ていると思われる。閑作を貞直とにらんだ余吾郎は、貞直の生き別れの遺子と自称するが、それを不審に思った貞直は自分の素性を明かさず、貞直の郎等として振舞う。妙算の場合と同じく、敵を欺くために偽物の位牌を置いているのである。その後、心太売りに扮した南方余字兵衛（十字兵衛の子）がやって来て、暗さに紛れて位牌を盗んでいくが、『侠客伝』第六回には、妙算の二子灘蔵・船蔵が担い商いに扮し、毒酒とその「敵薬」である豆腐を売りに来るという場面がある。南朝の者と北朝の者が互いに素性を探り合うという趣向をはじめ、位牌という小道具の利用や、脇役として行商人を登場させることなど、細部の設定においても『双蝶記』と『侠客伝』は共通点を有する。

前述のように、馬琴は「おかめ八目」の中で『双蝶記』の趣向を一つ一つ取り上げて批判しているが、換言すればその内容を十分把握しているとも言える。また自らの創作理念と歴史観が端的に表れている『侠客伝』に、『双蝶記』と類似する趣向が多く見出せるということは、良い意味でも悪い意味でも、馬琴は非常にこの作品を意識していることを意味する。趣向の面において『侠客伝』を『双蝶記』に似せて書いているのは、あるいは理念の面における相違を浮き彫りにするという、馬琴の戦略によるものかもしれない。南北朝の対立と予兆・卜占との関係に即してこの問題を考えると、『双蝶記』では大仏貞直を南朝の武将として設定した当初から南北朝対立の図式が崩れ、工夫を凝らして立てた怪異現象の趣向も、南朝が衰亡する歴史的必然を示す機能が弱まり、単に個人の運命を示すものになってしまうのに対して、『侠客伝』では怪異現象を通して南朝の敗北を前提として提示しながら、足利氏を批判すると共に新田氏をはじめとする南朝の遺臣たちの活躍を描き、やがて訪れるその不運を史書ならではの易学的理論で解釈し、さらに輪廻転生の設定（第十四回では後醍醐天皇と光明天皇をそれぞれ天武天皇と大友天皇の生まれ変わりとしている）によってその無念を相殺しようとする<sup>21</sup>と解されよう。

## 終わりに

「おかめ八目」における馬琴の『双蝶記』批判は主にその演劇めいているとこに集中しており、それ以外の部分、特に彼が読本を執筆する時に最も重要視する勧善懲悪のこと、即ち理念の問題についての言及はほとんどない。京伝が『双蝶記』において北条氏を南朝の一員として認め、大仏九郎貞直らを悲劇の英雄として描いているのは、馬琴の領けないところである、という先学の指摘が正しければ、彼にとって南北朝の政治的倫理のあるべき姿は『双蝶記』のそれと違うものになる。本発表では『忠臣水滸伝』から『侠客伝』までの数作品を取り上げ、京伝と馬琴における趣向の受け渡しを、主として予兆とト占に関するものに絞って考察し、特に『双蝶記』と『侠客伝』との比較によって、創作理念における二人の相違を浮き彫りにした。京伝読本は演劇に多い義理人情のジレンマに力点が置かれるあまり、歴史小説の世界を支える政治論（例えば南北朝の対立）の地盤が揺れ、工夫を重ねた予兆・ト占の趣向もその理論に結び付かず、その場限りのものになってしまう。それに対して馬琴の場合は、趣向としては京伝を含む先行の小説からの借用があるものの、論理としては政治的倫理の是正（例えば南北朝の正朔の問題）にまで及ぶ、史論さながらの小説観に則っており、予兆・ト占の記述は易学的に解釈され、事態の発展に必然性を与えるものとして機能しているのである。

### [注]

- ①藤岡作太郎『近代小説史』（大倉書店、1917・1）。
- ②大高洋司「『優曇華物語』と『月氷奇縁』——江戸読本形成期における京伝、馬琴——」（『読本研究』初輯、溪水社、1984・4）
- ③徳田武「解題」（『山東京伝全集』、べりかん社、1992・10～）。
- ④徳田武「解題」（『馬琴中編読本集成』、汲古書院、1995・4～）。
- ⑤『染松情史』の引用は『馬琴中編読本集成』11（2000・9）に拠る。以下同。
- ⑥徳田武「解題」（『馬琴中編読本集成』11）、620頁。
- ⑦『忠臣水滸伝』の引用は『山東京伝全集』読本1（1994・1）に拠る。
- ⑧『鴉鷲物語』の引用は新日本古典文学大系『室町物語集 上』（岩波書店、1989・7）に拠る。以下同。

- ⑨『日本古典偽書叢刊』第3巻（現代思潮新社、2004・3）、124～125頁。
- ⑩『双蝶記』の引用は『山東京伝全集』読本3（2003・4）に拠る。以下同。
- ⑪水野稔「双蝶記」（『日本古典文学大辞典』、岩波書店、1983～1985）。
- ⑫『莠句冊』の引用は江戸怪異綺想文芸大系『都賀庭鐘・伊丹椿園集』（国書刊行会、2001・5）に拠る。以下同。
- ⑬徳田武「解題」（『山東京伝全集』読本3）、701頁。
- ⑭同注（1）、437～438頁。
- ⑮同注（13）、694頁。
- ⑯拙稿「馬琴読本と五徳終始説——『墨田川梅柳新書』から『開巻驚奇俠客伝』へ——」（『国語と国文学』82-2、2005・2）。
- ⑰『俠客伝』の引用は新日本古典文学大系『開巻驚奇俠客伝』（岩波書店、1998・10）に拠る。以下同。
- ⑱「喜神」に関する記述は、馬琴が購入したと思われる『通徳類情』（文政12年12月14日付篠斎宛馬琴書簡）などの占いの書に見られる。
- ⑲同注（13）、707頁。
- ⑳麻生磯次『江戸文学と中国文学』（三省堂、1955）。
- ㉑同注（16）、53～55頁。

#### \* 討議要旨

大高洋司氏は、京傳と馬琴の間の趣向の受け渡しを厳格に証明しようとしているが、両者の間にそれほどきちっとした関係を言う必要はないのではないか。浜田啓介氏の「読本文学様式論」のような方向で、読本様式に共通した趣向のあり方で、京傳・馬琴に関わらず出てきているのではないかと柔軟に考えたかどうか、と尋ね、発表者は、馬琴の特徴をあくまでも京傳との比較を通して浮き彫りにしたが、読本を読む時、やはり幅広く考察する必要があり、今後の課題としたい、と答えた。

山下則子氏は、京傳の演劇的趣向として触れられたが、草双紙には演劇の影響を考えなければならぬ。馬琴も全く演劇から取っていないというわけではない。重層的に見ることが重要である、と述べた。発表者は、馬琴も演劇の趣向を多用することを認め、ただし『双蝶記』のようにそれで物語の基本構図が崩れることはあまりない、と答えた。

山崎佳代子氏は、方法論について、ヨーロッパで脚光をあびているツヴェタン・トドロフのインターテクスチュアリティという考えが応用できると思う。研究内容からしてインターテクスチュアリティの考え方を応用していけばヨーロッパに向けて発信できるのではないかと提案した。発表者は、和漢の史書にも予兆・ト占の記述が散見し、読本との間に一種のインターテクスチュアリティの関係があると思う、と答えた。